

ふつうって何

中 一

十人ほどの子どもたちが、音楽に合わせて、元気に思いつきり、体を動かしている。

私が小学六年生の時の送る会でのこと。その子どもたちが、バランスポールや新体操に使うような長いリボンを使い、六年生の私たちに出し物をしてくれた。思い思いに体を動かすその子どもたちは、とても楽しそうで、私もうれしくなった。見ていていい気持ちだった。

でも、その時、クスクスッと、何人かの小さな笑い声が聞こえた。きつと一、二年生ぐらいの低学年の子が、その子どもたちの演技が面白くて笑ったのだろう。でも、私にはそれだけではない笑い声のように、しかも、その場にいる全員が笑っているように、思えてならなかった。

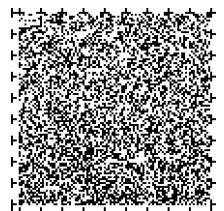
ひどい。ただ、そう思った。演技をしている子どもたちは、卒業する私たちのために、精一杯、心をこめて発表してくれているのに。それなのに、人

のことを笑うなんて、ひどい。どうして、人のことを笑うのだろうと思った。精一杯、自分の役割を果たそうとして

いる人のことを。演技をしている子どもたちは平気なのかと、気になってそちらを見てみた。

一瞬、おどろいた。その子どもたちは、うれしそうに笑みを浮かべていたのだ。一生懸命に演技している姿は、とてもたくましく見えた。最初はただおどろいて、すごいとしか思わなかったが、いつの間にか応援する形になっていった。がんばれ、と心の中で何度も繰り返した。人に笑われると、誰だってとてもいやな気持ちになるだろう。しかし、その子どもたちは、最初から最後までにこにこ笑っていたのだ。一つ一つの演技を見ると、本当に私たち六年生の卒業を祝ってくれ、その日まで練習を積み重ねてきているのがわかった。

私たちの周りには、一生懸命やっても思うようにできない人もいる。成果が上がらない人もいる。でも、人のために心を込めて、一生懸命力を尽くしてくれる人がたくさんいる。そんな人をばかにしたりそのしぐさを笑ったりしていいのだろうか。



私たちの周りにはさまざまな人がいる。例えば、上手に話したり歩いたりすることができない人、目や耳などに障害のある人がいる。しかし、それだけのことで、ばかにされたり仲間はずれにされてしまったりすることもある。そして、障害のない人が「ふつう」、障害のある人は「ふつうではない」という偏見がつくられてしまう。そういう差別をするのは、おかしいのではないだろうか。だいたい、「ふつう」と「ふつうではない」というのは、何が「ふつう」ではないのだろうか。上手に話せない、上手に歩けない、目や耳などに障害がある、容姿が違う、これらは、「ふつうではない」となのだろうか。

人間には、「ふつう」「ふつうではない」という区別はない。障害のある人もない人も、肌の色が違っていても、みんな平等である。失敗したら立ち直ろうとする。成功すれば、とてもうれしい。そういう心も、同じだ。しかし、障害のある人とすれ違った時に、変な目で見る人もいる。でも、そういう見方をするのはおかしいと思う。私たちは同じ人間だ。もともと人は、一人一人違うのだ

から、個性が違って当たり前だと思う。人それぞれに、優しい・おもしろい・怒りっぽいなどの性格、体の大きさなどさまざまな違いがある。そういう人との違いをあの人は私たちと違うからいやだというのではなく、きちんと受けとめることができれば、他の人のことがよくわかる優しい人間になれるはずだ。だから、障害のある人を自分たちとは違うと思わずに、その人のよさを知っていつたりみんなで助け合ったりして生きていけば、他人に対する偏見はなくなっていくと思う。そして人それぞれの違いを受け止め、みな同じ人として、ともに生きていければいいと思う。

